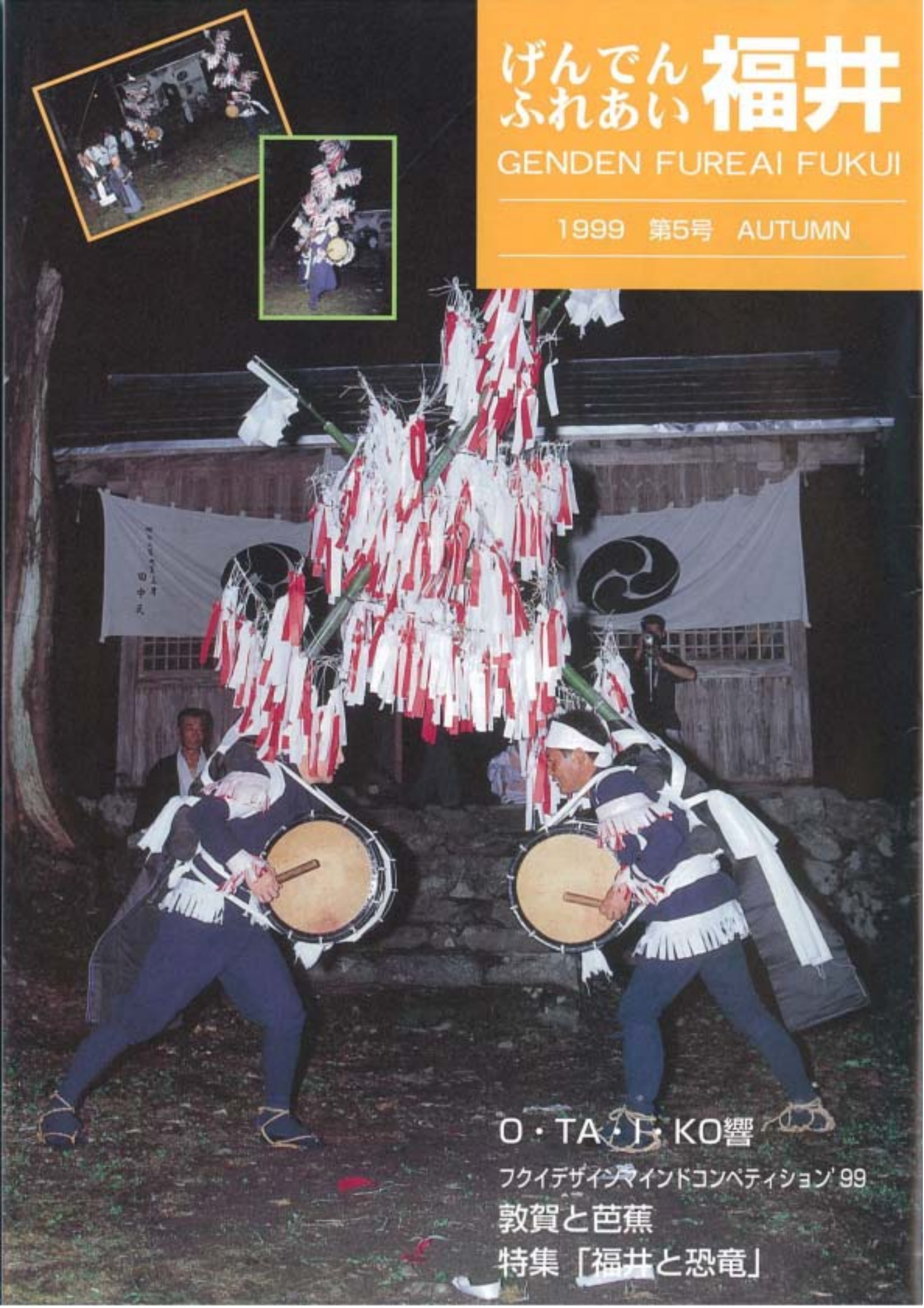
げんでんふれあい福井

GENDEN FUREAI FUKUI

1999 第5号 AUTUMN



O・TA・I・KO響

フクイデザインマインドコンペティション'99

敦賀と芭蕉

特集「福井と恐竜」

O・TA・I・KO響（ひびけ）

題字は書家吉川寿一氏の筆

和太鼓の迫力あるリズムを響かせたO・TA・I・KO響'99

10周年 とどろく和太鼓 織田町にひびく

和太鼓のコンテストや国内トップクラスの太鼓演奏者が出演する10周年記念「O・TA・I・KO響(ひびけ)'99」(同実行委員会主催)が去る8月21日、織田町オタイコ・ヒルズで盛大に開かれました。ステージ前を埋めた観客約1万人余り、熱演する勇壮な響きに圧倒されていました。

今年は10回目を記念して、歴代のコンテスト受賞者が出演したグランドチャンピオン大会には、1本打ちと団体の2部に分け、5人の名手と7団体が熱演、汗を飛ばしながらばちを振う出演者の姿に会場から大きな拍手が送られました。

夕方からは、伝統のちびっこ明神だいすりや明神ばやしの饗宴のあと、幻想的にライトアップされた舞台で国際的に活動している渡辺洋一氏主宰の太鼓集団「天邪鬼」、林英哲氏率いる「英哲風雲の会」が華麗なばちさばきを披露。地元OTAIKO座「明神」は西日本一の大太鼓「明神」を駆使し、オリジナル曲「夢・開眼」を「天邪鬼」とジョイント公演し、夏の暑さを吹き飛ばす力強い音響が夜の空気を震わせていました。

太鼓の町　織田町には、県無形民俗文化財指定の『明神ばやし』保存会、伝統のだいづり太鼓を可愛らしく表現する『明神ちびっこたいこ』創作太鼓グループがあります。

同町は文化活動やスポーツの総合施設を平成6年度に完成させ、内外に交流の輪を広げようと10年前から伝統芸能の伝承をはじめ伝統と創作が融合した和太鼓の祭典が開かれています。そのイベントと伝統のルーツを探ってみました。

CONTENTS

・O・TA・I・KO響　P2.3
・フクイデザインマインドコンペティション'99　P4.5
・特集「福井と恐竜」(その1)　P6
・第3回福祉寄席　P7
・伝統芸能シリーズ 八坂神社の獅子舞（今庄町八飯）　P8
・敦賀と芭蕉　P9
・情報ファイル　P10.11

表紙の説明

甦った「太鼓踊」
（敦賀市池河内）

過疎化による後継者不足で、昭和61年から中断していた敦賀市池河内の県無形民俗文化財「太鼓踊」が平成9年夏、12年振りに復活。今年も8月22日、地元で、当地出身の竹田一実さんらの手で披露されました。

池河内の太鼓踊の起源は、古文書もなく定かでありませんが、当区の諏訪神社に奉納される雨乞い踊りで遠い昔から口伝えに受け継がれてきたものです。

太鼓打ちは、すこぶる軽装奇抜な扮装で、腹に太鼓をのせ、背には3米余の姫用竹を細引きひもで結ぶ姿で登場します。踊りは、音頭取りの歌に合わせ、太鼓と鉦を打鳴らしながら囲伸自在に踊ります。丁度蝶に似た優雅な踊りです。

昔、夏の日照りが続き、水枯れてくると、各地から「池河内さん、雨乞いして下さい」と依頼が続々ときて「雲たもれ竜王、雨たもれ竜王」と祈願したといわれています。

独創的太鼓グループ
OTAIKO座「明神」

町では平成元年、伝統ある太鼓文化のシンボルとして西日本一の大太鼓「明神」を製作。この大太鼓を中心としてイベントと創作太鼓集団の育成に力を入れてきました。これに応えてOTAIKO座「明神」が発足。プロの大太鼓奏者渡辺洋一氏の熱心な指導をうけ、平成3年8月、大太鼓組曲「夢・開眼」を創作し「O・TA・I・KO響'91」でメンバー10人の創作太鼓集団としてデビューを果しました。「明神」は「O・TA・I・KO響」をメインステージと位置付け、対外的には積極的に各地・各種のイベントに出演、平成8年にはオーストラリアのアデレードフェスティバル'96に招待され、高い評価をうけるなど織田町の文化大使として町のアピールに大きく貢献しています。特に町が整備した太鼓練習館など総合文化施設オタイコ・ヒルズを利用できる恵まれた環境のもと週3回の練習を重ね、現在19人の構成で技量の向上に努力しています。

座長の上坂優さんは「私達は幸せなことには太鼓の世界の第一人者渡辺洋一さんや林英哲さんなどの知己を得、指導助言を受けながら施設にも恵まれています。「明神」結成10年の来年に向け、古典芸能にも目をむけて、新しいステージづくりに挑戦したい」と今後の抱負を語っていました。

勇壮な太鼓の演奏を競うグランドチャンピオン大会＝オタイコ・ヒルズ野外ステージ

熱演するOTAIKO座「明神」

明神ばやしの演技

中央に地太鼓が位置し、これを挟んで平太鼓が左右に二つ対象に並べられています。「出て来いやー」と地太鼓の打ち手のかけ声とともに上手と下手から法被に鉢巻き、股引き姿の童達が走り出て左右一列に並んで打ち出す。ドドンガドン、ドドンガドン、ドドンガドンドンドンガドン……先頭の童が太鼓を打ち、他の者は同じ動作をします。以上が明神ばやしの初めの部分。童達は6つの形を打って次の者と交替する。この様に交代を繰返し全員が終ると大人の打ち手の登場。大人は一人ずつ出る。型は同じく六つですが、子供達の元の型であり、しかも一人ひとりが自分で工夫しているだけに勇壮で感動的です。大人が一通り終ると茶利が登場します。茶利は面白おかしく打ちます。勿論、通して笛がメロディを演奏します。

明神ちびっこたいこ

伝統芸能「明神ばやし」
古里づくり・後継者育成に貢献

織田町の由緒ある剣神社に伝わる「明神ばやし」は約350年前からの古い歴史と伝統をもち、豊作に願って行われる「お渡り式」という神事がありました。この「お渡り」を遂行するには、まず氏子53ヶ村に大祭の言触をするため触獅子と称して獅子舞が廻りはじめ大祭の神事行列が練り歩きました。

この行列の先頭が露払役の台ずるといわれています。

行列が村を練り歩いているとき、神社では祭が続けられ、境内に櫓が組まれ、その上で台ずるが打ち鳴らされました。大人達は勿論、子供達もちい様達に教えられて打ったに違いないと思われます。このちい様達のことを茶利と言われました。

時代が移り変わり、現在では童達は子供打ちとなり、茶利は道化的ばちさばきも取り入れ面白くおかしくもある打ち方に変化したといわれています。

明神ばやしには、六つの型があり、「天つき」「胴つけ」「壁とり」「耳かき」「袴さばき」「禅がけ」で構成されています。六つとは天地六号に感謝する意だと伝えられています。

昭和36年、明神ばやし保存会が結成され、大人の台ずると子供の台ずると一緒にして「明神ばやし」として発足しました。昭和46年福井県の無形民俗文化財に指定されています。

ここ10年来、10月9・10日、織田まつりのメインとして剣神社では、保存会の人達によって明神ばやしが奉納演奏されるほか、山車に乗って町内を露払いの行列が歩きます。現在の台ずるが色々と変っても保存会の手で民俗芸能の本旨は引継がれています。

一方、明神ちびっこ太鼓のグループも組織され、小学生、幼児を対象に伝統技法の伝承活動も進められ、古里づくりや健全な青少年の育成にも役立っています。

フクイ デザインマインド コンペティション

Fukui DESIGN MIND competition '99

身近な暮らし・社会に提案
ユニークで独創性を競う

福井県ではデザイン立県を目指し、県民のデザインマインドの向上を図ろうと「デザインマインドコンペティション'99」を企画。その公開審査会が10月3日福井市の県国際交流会館で行われ、高校と一般の混合わせて13チームが身近な社会や暮らしについて、それぞれアイデアを発表しました。職業選択のための体験型学習問題や台所改善、町づくりなど独創的でユニークな提案が相次ぎ、審査員をうならせていました。

審査の結果、高校の部では春江工業のMOMOチーム、一般の部では仁愛女子短大の竜巻組が金賞に選ばれました。

財団では、本年度からこの事業に協賛し、受賞者全員に「デザインマインド」を象徴した特製のトロフィーを副賞として贈りました。

金賞を受け喜びのMOMO、竜巻組チーム

金賞

高校の部 **MOMO**（春江工）

一般の部 **竜巻組**（仁愛短大）

このコンペには、高校の部6チーム、一般の部では7チームがエントリーし、寸劇や自作のコンピュータグラフィクス、パネルなどを使い、7分の制限時間内で、デザインに至るまでの過程を発表。審査は武蔵野美術大学教授の長澤忠徳さん、県デザイン協会長の松山潤明さん、消費生活アドバイザーの帰山順子さんが当り、「課題の発見の視点」「探究力」「解決、改善提案のまとめ方」「発表の出来栄え」などをポイントに審査をうけました。その結果、審査委員から下表のとおり受賞チームの発表が行われ、参加者たちから大きな拍手が送られました。

審査委員長の長澤教授は、この大会の総評として次のとおり語っていました。

「この大会も2回目を迎え、各チーム共提案内容が濃いコンペで、前年に較べレベルアップがうかがわれ、グレードの高いものでした。各チームの成績はいづれも僅差で審査に苦労しました。

今の世の中は「何が問題か、分からないことが多い」分からない問題を解決方法を見出し、社会を変えていくことが大切。デザインとは人のために、自分の問題として取り組む姿勢です。デザインマインドは

「Design」……

本来デザインとは「意匠」や「図案」という意味だけでなく、課題を発見し、その解決策を考えだし、その内容を表現するプロセスであると言えます。

デザインは、いまや産業の振興や魅力あるまちづくり、生活文化の創造を図っていくうえでますます重要なものになってきています。

どんなコンペ？

3人でチームを作り、社会や普段の暮らしの役に立ったり生活を豊かにする「もの」（道具、家具など）や「こと」（イベントの企画等）をデザインしてもらい、その内容を公開プレゼンテーションにて審査し優秀なチームを選定するというものです。

		チーム名	学校・所属	氏名	発表内容(テーマ)
高校の部	金賞	MOMO	春江工業高等学校	河津百美 近藤芳樹 中口元	真剣に、あそぶ
	銀賞	建築クラブ	敦賀工業高等学校	中江常雄 古川健太 稲村有司	将来の敦賀の街並み
	銅賞	Architectural team of TTH	武生工業高等学校	門丹生翠 島田友美 辻ひとみ	やさしいキッチン
一般の部	金賞	竜巻組	仁愛女子短期大学	浦野琴仁 村田記子 廣部かほ里	ひらく（コマンドO）
	銀賞	いきいきデザインワークス	生活情報誌「WALKER」編集チーム（金津町）	西山政信 小川秀夫 西川圭生	情報誌による身近なまちづくり
	銅賞	TWILIGHTS（トワイライツ）	福井市在住のデザイナー集団	山本泰雄 大嶋理恵子 青山謙二	ゴミステーション

「デザインマインド」を象徴した特製のトロフィー
財団では副賞として受賞者に贈呈しました。

将来の日本の姿を探していくことに繋がると思います。今日参加したチームは来年は新しい仲間をつれて、家族もつれて参加してほしい。来年の大会を期待しています。」

受賞チーム発表のあらまし

高校の部

春江工 MOMOチーム

テーマ 真剣に、あそぶ

最近の就職難の時代に職業系高校卒業者の離職率が高い。その原因は「体験と知識の釣り合いがとれず、見つける術を知らない。」「情報があっても組織より個性を生かす方法を知らない。」と指摘し、自主的な職業選択するために次の体験型学習の大切さを提案しました。①夏休みの学校以外の体験に参加して遊べ②無人島で情報から離れて遊べ③職人に弟子入りして遊べ―これらの体験が「真剣に、遊ぶ」ことでハッピーな就職となることを結論付けていました。

春江工MOMOチームの発表

敦賀工 建築クラブ

テーマ 将来の敦賀の街並み

敦賀の街づくりについて敦賀の歴史、貿易、観光などの特色と街の誇りを生かすため将来の敦賀の街並みをデザインしました。そのポイントは「水との共生、運河の連設」をあげ、①敦賀駅を運河の玄関とし、港まで運河を引く。交通網は水上バスや船による物流交通とし、高速交通は地下に誘導する。②街並みは水との感覚にマッチさせ憩いの空間ポケットパークなどを設ける。③気比神宮を聖なる地としてタイコ橋で結び、歴史的建造物などを保存継承する計画などを描きました。

武生工 TTHチーム

テーマ やさしいキッチン

高校生にとって台所が低くて使いにくいことに着目して、台所の高さは使う人の身長によって改善する工夫が必要だ。見せる空間、食品の収納箇所との関連など多様性があるが、料理、労働時間、市販品の企画調査を行い、キッチンの高さの目安として「身長÷2＋5㎝」を示した。これからの台所は、男性、老人、子供と多くの人が使う。特に高齢者、障害者（車椅子）の人が使用できる「やさしいキッチン」を面積、企画を示して提案しました。

MOMOチーム発表パネル

一般の部

仁愛女子短大 竜巻組

テーマ ひらく（コマンドO）

子供の生活や行動範囲（学校―家庭―学校）など取り巻く環境が20年前の子供と今の子供と較べ、大きく変化しています。ゲームなどで家にとじこもることが多く、遊び、友達とのコミュニケーションが不足していることに着目し、子供の心をひらく教育問題を取り上げました。

解決策として・子供が大きな声を出してドアを開く仕組み・大きく揺して開く仕組み・ジャンプして開く仕組み・ペタルを用いて開く仕組みなどを図示し、子供が発散することなくドアを開くことができる設備環境が子供の心をひらくことに繋がると結びました。

仁愛女子短大竜巻組の発表

いきいきデザインワークス

テーマ 情報誌による身近なまちづくり

今までの町づくり計画は行政任かせで住民の声が無視されてきました。そこで住民の声を取り入れた情報誌づくりを通した町づくりを提案。将来の金津町を対象に町の歴史、JR駅前の交通発着状況、商店街、周辺住宅地の現状を分析し、将来を見通した住民へのアンケートを実施し、若者の集まる魅力ある施設や公園などを計画した地域情報誌（WALKER）を全町に配布してきました。町づくりは住民一人ひとりが考えてもらうための参加意識を高めることが先決です。情報誌の発行を続ける行動を通じて町づくりを提案しました。

TWILIGHTS（トワイライツ）

テーマ ゴミステーション

福井市のゴミ問題の現状を取り上げ、ゴミ収集箇所に町の景観などを考慮したネットをかける装置付きゴミステーション「Benet」の模型を展示、説明しその設置を提案しました。

この発想は、ゴミ問題の敵ともいえる●カラスや動物からの被害を防ぎ●ゴミステーションの汚れを解消●燃えるゴミ、燃えないゴミ、収集日の表示など市民意識の啓発に役立つことを挙げました。また、その設備の設計規模や経費見積（2万円程度）なども提示していました。

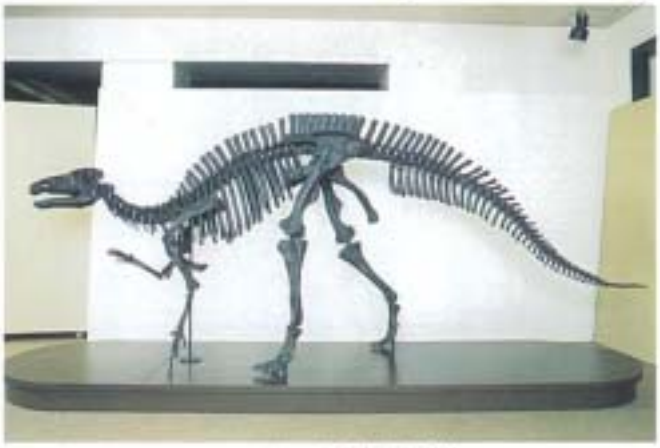
竜巻組　発表パネル

特集 福井と恐竜（その1）

福井県は、日本において有数の恐竜化石の産出地として発掘や研究の分野で多くの成果をあげ、国内はもとより世界各国から注目を集めています。

県では、現在全国の約8割の恐竜化石を産出している勝山市に平成12年の開館を目指し県立恐竜博物館（仮称）を建設中です。またこれを核にして来年の夏には「恐竜エキスポふくい2000」も勝山市長尾山総合公園をメイン会場として開かれることが決定しています。

昭和63年の恐竜化石発掘予備調査から2次にわたる調査を担当、指導されてこられた県教育庁文化課参事で理学博士の東洋一さんに「福井と恐竜」をテーマに特集シリーズとして3回にわけ解説してもらうことにしました。



フクイリュウ全身復元骨格

県立博物館

恐竜時代の古環境を解明 発掘調査（勝山市北谷町）多くの化石

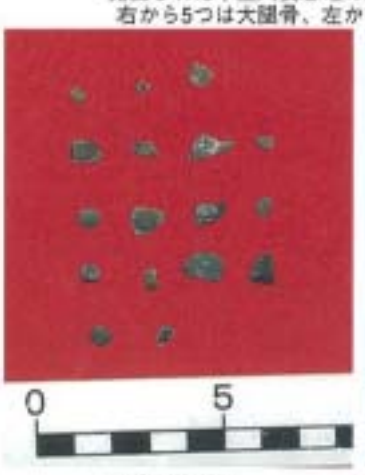
今から約一億年以上前、北陸一帯はアジア大陸の縁辺部にありました。もちろん今の日本海は影も形もありませんでした。その頃の福井県の嶺北地方一帯には、広い盆地状の地形が広がっていました。河や湖沼の周辺には森林も繁茂していました。現在、福井県立博物館が発掘調査を進めている勝山市の発掘現場は、そのような河の岸辺付近だったと考えられます。このようなところに、勝山市から発掘される恐竜たちは棲んでいたのです。

平成元年から始まった「福井県恐竜化石調査事業」は1次、2次と発掘調査を進めてきました。その結果、初めの予想を大きく上回る数の恐竜化石が発掘されました。そして、肉食恐竜や草食恐竜の群れの存在や、恐竜以外の動物群の姿も明らかとなり、恐竜時代の古環境がわかるようになりました。

発掘された中型肉食恐竜の大腿骨と上腕骨
右から5つは大腿骨、左から5つは上腕骨

勝山市から発掘された恐竜のうち、代表的な種類は2種類あります。その最初のものは、草食恐竜イグアノドン類です。この恐竜には栗田福井県知事が「フクイリュウ」という愛称をつけられました。頭骨や背骨など全身の輪郭がわかるほどの骨が発見されています。また、平成6年には全身骨格が復元されています。二つ目は、中型の肉食恐竜です。前足には鋭く大きな鉤ツメをもっていました。大腿骨は約50センチメートルあり、この大きさから全身は約4メートルと推定されています。この二つの恐竜は、これまで発見されていない種類で、おそらく新属新種となることでしょう。

2次調査では、恐竜の成長に関する新しい化石も発見されました。中型の肉食恐竜と同じ形をした大きさの異なる大腿骨や上腕骨が複数見つかりました。この事実は、発掘現場周辺で肉食恐竜の赤ん坊や、成長段階の異なる個体が生活していたことを意味します。さらに、恐竜の卵殻片も多数見つかり、間違いなく発掘現場周辺で産卵が行われていたことも確実となりました。



恐竜の卵殻片

中型肉食恐竜の足の指。左は大人、右は幼体

勝山市の発掘現場の地層は、中生代白亜紀前期という地質時代で、今から約1億2千万年前です。この頃、大陸の内部でも豊かな恐竜群が生活していました。中国遼寧省からはごく最近、体に毛の生えた肉食恐竜など、恐竜から鳥類への過程がわかる化石が相次いで発見されています。福井県の恐竜たちと大陸内部の恐竜群との関係も大変興味のあるところです。

勝山市北谷での恐竜化石発掘調査

【文・福井県教育庁文化課参事
理学博士　東　洋一】

歓迎をうけた第3回福祉寄席

桂 千朝・米平さんらを招く

上方落語界

財団では人に優しいゆとりとふれあい活動の一環として県内の高齢者や障害者との交流を通じてボランティアの輪を広げようと10月19日から21日まで3日間、落語界の人間国宝桂米朝師匠の門下桂千朝・米平さんら3人を招き、県内6つの老人福祉施設（別表のとおり）で福祉寄席を開催しました。

各施設とも開演30分前には入所者や最寄りの福祉施設、敬老会のお年寄りらが会場に詰めかけ、3日間で延700人が集まり、歓迎に包まれたふれあい寄席となりました。

寄席では桂歌々志さんの前座に始まり、米平さんは、扇子や手拭いを使った落語のルールを面白く解説、題材では眼科医と患者との掛け合いをテーマにした「犬の目」や「道具屋」を披露しました。千朝さんは、街回りの商売風景を軽妙な呼び声と身ぶりで紹介、主題では酒飲みの振舞いを演出した「替り目」や「厩邪うどん」を熱演し、各会場とも爆笑の渦に巻き込んでいました。

財団では、福祉寄席をさらに充実するため訪れた施設の関係者にアンケートを行い、その結果を今後の計画に反映することにしています。うち今回の感想について主な声を紹介することにしました。

落語家を囲み記念撮影＝大野和光園
2列目、右から2人目歌々志さん・千朝さん・5人目米平さん

福祉寄席を定着行事に

初日開催しました敦賀市の渓山荘施設長櫻井智行さんは「福祉寄席を当施設で毎年開いていただき感謝しています。特に今年は国際高齢者年であり、意義ある催しものに一同喜んで歓迎しました。お年寄りが楽しい余生を送るためには「笑い」が原点です。また施設運営面でも励みになります。是非今後も続けてほしい。」また大飯町の楊梅苑の指導員坂本孝司さんは「初めて遠いこの施設に「福祉寄席」を企画していただき心待ちにしていました。じかに一流の落語家に接することができて、みんな喜んでくれました。

明るいふれあい活動を互に楽しめる場として今後も期待しています。」と定着した行事への声が寄せられました。

千朝さんの熱演＝愛全園にて

米平さんと握手で感激

大野市の和光園に入所しているお年寄りの一人は「今日は生の落語を聞いて大変楽しい一日でした。桂千朝さんらと握手することもでき、明日からも元気が湧きます。又来て欲しいと思います。」と喜んでいました。

金津町の雪雀ヶ丘寮でボランティア活動をしている日赤奉仕団の柳森美智子さんは、「来年から老人介護保険制度が始まるなど高齢者福祉は転機に入ります。福祉は思いやりと心の通うふれあい活動が最も大切です。この催し物も慰問行事に終るだけでなく心の通うふれあい活動の場として今後も一貫して続けて下さい。」と福祉寄席に期待する感想が述べられいました。

10/19（火）	10:00～	敦賀市	渓山荘
	14:30～	大飯町	楊梅苑
10/20（水）	10:00～	勝山市	さつき苑
	14:00～	大野市	大野和光園
10/21（木）	10:30～	金津町	雪雀ヶ丘寮
	14:00～	福井市	愛全園

ボランティア活動紹介

精神保健福祉 ボランティアすぎなの会

ふれあいで「心の貯金」を

すぎなの会は、坂井郡下で心の病を持つ障害者のためのボランティア活動を続けている団体で、金津保健所が主催するボランティア養成講座を終了した人たちによって平成6年2月結成した自主グループ（現在会員37名）です。

毎週水曜日、同郡下で授産所（あすなろ工房）に通っている障害者に楽しみ活動としてペン習字や抹茶を飲む会を指導したり、軽作業の手伝いや時には家族会とバザーを共催するなど楽しみながらふれあいの輪を広める辛抱強い活動を続けています。

同会会長の田島三男さんは「会では障害者に対する正しい理解を広める啓蒙運動を第一に進め呼びかけています。そして、ボランティアの方には障害者と互いにとけこんだふれ合い活動をすることで「心の貯金」にすることが大切。」と語っています。

楽しみ活動の一環として開催したバザール

シリーズ ふくいの伝統芸能

福井県指定無形民俗文化財

八坂神社の獅子舞（今庄町）

今庄町八飯に所在する八坂神社（御祭神・素盞嗚尊）の由来は、伝説によると、この村の草分けの住家が8軒になった頃、神社を創建し、集落の氏神様として祀られるようになりました。その起源は明らかな記録が残っていませんが、約1300年以上前といわれています。

毎年10月9・10日の神社の祭礼には、伝統芸能として未婚の青年の手によって、各家を巡る獅子舞が舞われ、神社前でも厳粛な舞いが奉納されます。

本祭の獅子舞＝八坂神社にて

獅子舞の由来

往時まだ名もないこの地の草分けの住民達8軒が力事仲むつまじく暮らしていました。その後分家もでき16軒になった頃、悪病が集落に蔓延しました。困り果てた村人達は氏神様に悪病退散の願いを掛けたところ「都に高名な彫刻師がいるから獅子頭を造ってもらい、それをかぶって家々を舞い歩け」とのお告げがありました。村人達はこのお告げのとおり実現しましたところ悪病は直ちに治り、集落は元の平和な村に戻ったといわれています。

この由来が八坂神社の獅子舞として今日までうけ継がれ、昭和48年、福井県無形民俗文化財に指定され、地元保存会の手で伝承されています。

獅子舞の巡行と祭礼

この祭礼には獅子舞保存会（八坂会）を中心に集落総出で幟り立て、幕張り、堤灯立てが行われます。獅子舞は青年達の手で、お獅子様の衣（オケヤオ）の修繕など数日前から周到な準備が行われます。

獅子舞い手は未婚の男子で、現在では高校生以上の青年が当ることになっています。

舞い手は9日の宵のうちから保存会役員の指導をうけ、稽古まわしを始め真剣そのものの練習を行い、特に本年度初めて舞う青年は緊張の連続で本番に備えます。

午後10時頃、獅子舞はまず宿殿（宮守）の出屋の間で舞い、その後神屋敷を次々と訪れ舞い歩きます。

行列は高張り提灯、おねん様（木彫りの面を約150センチ程のゴエイの先に付けたもの。堤殿がこの役にあたります。）獅子、太鼓車、高張り提灯、村人の順で続きます。現在13軒の神屋敷を全部舞い終る頃には夜明けとなります。

翌10日午後、鐘を合図に村人達は神社に参集し祭式が執り行われ、昨晩乗り出し（その年の一番先に舞う2人）が拝殿内で舞いを奉納します。

日野川で身を清める禊に向う「乗り出し」の若者

宵宮　神屋敷での奉納舞

古里の行事を大切に後世に伝えたい

八坂神社の獅子舞は派手さはないが厳な舞いであり、このお獅子様をかぶることを子供達は夢に見て成長したといわれています。

八坂会の藤本邦夫会長さんは「伝統ある獅子舞を中心に古里の行事を大切にして、大人から子供へと私達の手でしっかりと伝えていきたい。2年度にわたり財団助成をうけましたので、更に祭礼の充実と後継者の育成にも力を入れます。」と語っていました。

獅子の舞い方

お獅子様は神屋敷の前に立つと衣をまくり太鼓の音に合わせ、おねん様及びお獅子様は右回りに進み、3足半の時、親獅子（雄足）は振り返って子獅子（雌足）を見ます。この動作をハカルといいます。また3足半進み、親獅子は小獅子を見返る。次におねん様は玄関先で位置取りを行い、舞いが始まります。

獅子はおねん様を中心に右へ歩き、足を揃わせること3回半、太鼓の音に合わせ体を振る動作を3回半行い、その後おねん様に目礼し獅子の衣をたぐりながら庭の中央で休みます。この動作をネルといいます。子供達は、お獅子様を取り囲むようにサヤ竹を持って集まり「お獅子様起きよ」と何回もはやし、呼び起こします。しばらくして獅子は立ち上がり、足を揃わせること3回半、体を振る動作を3回半行い、おねん様に礼をして終ります。

その間、一般の男子は、伊勢音頭を踊い、一舞は約30分程度かかります。

敦賀と芭蕉

敦賀市文化協会では、今年は創立40周年を迎え記念事業の一環として「敦賀と芭蕉」にスポットを当て「奥の細道」の敦賀くだりの記文学碑の建立を計画しています。また、同市俳句作家協会では、国の重要文化財「奥の細道」素龍清書本複刻版の刊行を予定しています。この機会に奥の細道の旅敦賀を訪れた芭蕉の足跡を探ってみました。

遊行上人砂持絵図（敦賀市史より転載）

遊行の砂持ち神事

お砂持ちの神事は遊行2世の他阿真教上人の故事に由来しています。「遊行上人絵伝」の第8巻に他阿真教の当時の土木工事の様子が描かれています。このことが先例となって正安3年（1301）第2代遊行上人の一団が敦賀津（港）に来津したとき、かならず浜から唐仁橋町、御影堂前町を経て気比社の社殿前と中門の前との間の参道に土砂を運ぶこと3度繰返したと伝えられています。このことが気比社門前町の形成につながり、中世における敦賀港の港湾都市の発展を促すことになりました。

芭蕉像と句碑＝敦賀市・気比神宮境内

松尾芭蕉は元禄2年（1689）3月江戸深川を立ち、日光、奥州、出羽、北陸と、いわゆる奥の細道の旅に出ました。

月清し遊行のもてる砂の上

芭蕉は福井の俳人神戸等栽に歓枕や史跡を案内させ、8月14日今庄の宿を立ち、木の芽峠を越えて敦賀に入ったのは同日の夕刻、敦賀は気比神宮の長祭りも終って閑散な夕べであったと思われます。唐仁橋（現在の相生町）の出雲屋に宿をとり、気比明神に夜参りすると仲秋の名月の前夜で、月は皎々と白砂を照らし、遊行上人（2世）のお砂持ちの神事を伝聞され、懐古をこめて「なみだしくや遊行がもてる砂の露」と詠まれました。その後推敲を経て標題の名句に落ちつかせています。

翌15日の夜は、あいにく雨で、仲秋の名月を見ることができず、「名月や北国日和定めなき」と嘆じた名句は有名です。

宮参りを終えた芭蕉等は、あまりの月夜の美しさに誘われ、気比の松原まで足を延ばしました。「ふるき名の角鹿や恋し秋の日」など敦賀の景勝と名月鑑賞に困んだ俳句が詠まれています。

色ヶ浜・本隆寺にある芭蕉句碑

寂しさや須磨にかちたる濱の秋
波の間や小貝にまじる萩の塵

色ヶ浜での清遊

芭蕉は、16日敦賀半島の西浦地区色ヶ浜を訪れています。名月の15日は雨で落胆しましたが、当日は快晴に恵まれ、敦賀の廻船問屋の天屋五郎右衛門（俳号玄流）の案内で敦賀湾上の船遊びや浜での探索、色ヶ浜の本隆寺での句会も盛況で、翁は機嫌上々でした。芭蕉にとって、この地での清遊は奥の細道の旅の最後を飾るに最もふさわしい俳諧の境地そのものであったものと偲ばれます。

「汐染むるますほ小貝を拾ふとて色ヶ浜とは言ふにやあるらむ」（山家集）を詠んだ西行の歌境と自然の景勝が醸し出す閑寂の世界に心ゆくまで浸り続け、標題の2句は、その心境と情景がうかがわれ、「奥の細道」に収められています。翌日、芭蕉一行は常宮の社に立ち寄り町に戻りました。

芭蕉が敦賀を立った日は明らかではありませんが、出迎えに来ていた八十村路通を伴い美濃国（大垣）に向け、敦賀を後にしました。

箱に納められた「おくのほそ道」素龍清書本（上）「細道伝来記」（左下）

国の重文「おくのほそ道」清書本敦賀市西村家が所蔵

芭蕉は奥の細道の旅後、推敲整理して元禄7年（1694）初夏、その定稿を門人の能書家素龍に清書させ、標題の「おくのほそ道」だけを芭蕉が自ら書いて一冊としました。

その清書本は、歌後、門人や親戚ゆかりの人などの手を経ましたが、最後に敦賀市新道野の西村野鶴の手に渡り現在も同家に所蔵されています。

げんでんふれあいコンサート3会場で開催

由紀さおり 安田 祥子 童謡コンサート 敦賀市民文化センター 7/26

財団では、7月26日、敦賀市民文化センターで、敦賀港開港100周年記念事業に協賛して、由紀さおり・安田祥子姉妹を招いて、げんでんふれあいコンサートを開催しました。従前に入場前売券を発行したこともあり、会場は1200人の聴衆で埋まりました。

第1部では“サトウハチローを歌う”をテーマに「めんこい仔馬」などの童謡をはじめ「二人は若い」など懐かしい歌謡曲も披露。二人の素晴らしい歌唱力に大きな拍手が送られました。第2部では“「赤い鳥」のうた”「お山の大将」など日本の美しい童謡15曲を歌い上げ、特にリクエストコーナーを設け、ファンの要望に応えて、「だんご3兄弟」や「我は海の子」を、童心にかえった聴衆も合唱、手拍子が湧くなどふれあいコンサートを盛り上げました。

「ドイツ音楽への誘い」 みなと博きらめき会場 8/4・5

市民ハンドベルクラブも特別参加

財団では、8月4日・5日の両日敦賀港開港100周年記念事業としてみなと博きらめきステージで「愉快なドイツ音楽への誘い」と銘打ち、全国各地で演奏活動を続けているホフブロイ　ブラスフォーゼを招き、ふれあいコンサートを開きました。

珍しい吹奏楽器アルプホルンのファンファーレに始まり、ドイツ民俗音楽の演奏、女性歌手による名曲「ローレライ」やミュージカル歌曲などを披露。また、今回初めて舞台発表となった地元市民によるハンドベルクラブも特別参加し、日本歌曲「夏の思いで」など見事に演奏して聴衆から大きな拍手が送られました。このタベには延600人の人が集まり終盤、チロリアン・ダンスを聴衆も対を組んで踊り、最後に「故郷」を合唱して終幕を飾りました。

東京シティフィルポップス inハーモニーホール 県立音楽堂 11/3

財団では今年1月好評を博した「東京シティフィルハーモニック管弦楽団」を招き、11月3日、福井市の県立音楽堂大ホールでふれあいコンサートを開きました。

テレビなどでお馴染みの作曲家、宮川泰さんの指揮で、時折り愉快なトークを交えながら70名で構成された同楽団によって、1部では江利チエミ、ザ・ピーナッツメドレーなど、2部では日本唱歌「村祭り」などを演奏。また今回はゲストにボーカル歌手本田美奈子さんがシャンソン「ろくでなし」などを歌い上げ、会場を埋めた約1、300人のファンは、ダイナミックなオーケストラサウンドと美しいハーモニーに堪能していました。

国際丹南アートフェス'99 武生市 8/12～23

さまざまな素材で表現を競う現代美術フェスティバル'99―武生市民ホール

国内外の現代美術作家が「素材と表現」をテーマに掲げた「国際丹南アートフェスティバル'99」（同実行委員会主催）が8月12日から23日までの日程で、武生市民ホールと日野川河川公園を会場に開かれました。

今年は日本のほか米国、ドイツ、韓国など海外からの出品27点を含む67人が参加、本県からも19人が参加し同ホールに62点、河川公園に6点の作品が展示されました。

市民ホールには、地場産業に関係の深い鉄、土、木、布、紙を使った作品が目立ち、世相を鋭くえぐる作品や国境を越えた独創的な表現をした作品群が並び、会期中延500人が訪れ、現代美術の力作に見入っていました。

日本海交流美術展 敦賀市 8/10～14 小浜市 8/18～23

若狭湾沿岸の市町村で創作活動をしている美術作家や韓国・東海、慶州両市の美術協会員らの作品約90点を集めた日本海交流美術展（若狭湾美術作家集団主催）が、8月10日から14日まで敦賀市、プラザ萬象で、18日から23日まで小浜市、県若狭図書学習センターで開かれました。

敦賀市は東海市と、小浜市は慶州とそれぞれ姉妹都市の関係にあり、両市から書・絵画に合わせて30点が参加、県内を中心とした作家の作品は絵画・工芸・書・写真など60点の力作が展示されました。特に今年は敦賀港開港百年みなと博開催記念事業として韓国両市の美術作家ら8人も敦賀入りして、国際交流の輪を広げる美術展となりました。

▲レオン・フライシャー（ピアノ）ら演奏家によるツアーコンサート（9/3）

コーラスの世界へようこそ▶「響きの扉」をテーマに合唱を披露する児童たち（8/27）

かつやまアスペン音楽祭 ウィークコンサート開催

8/27～9/4

かつやまアスペン音楽祭（アスペンウィーク・インかつやま'99実行委員会主催）が8月27日から1週間の日程で、勝山市民会館をメイン会場に市民による合唱、合奏をはじめ一流の音楽家による演奏会など市内を美しい音色で彩る祭典が繰り広げられました。

また、9月4日には勝山市と米国・アスペン市の友好都市締結5周年を記念した市民フォーラムが開かれ、町の活性化と国際親善を果す多彩なイベントとなりました。

初日は、オープニングセレモニー＆コーラスの世界へようこそ「響きの扉」と銘打ち、中学生を中心とした合唱団をはじめ児童、大人全員によるコーラスの大合唱を披露。28日以降、市内中学校吹奏楽、子供ピアノ演奏、アマチュアバンド、市内外のオーケストラが公演すなどの日程をこなし、3日夜にはメインツアーコンサートを開演し、世界3大音楽祭といわれるアスペン音楽祭に出演している一流のプロ音楽家が出演、クラシック音楽の美しい調べに訪れた約600人の聴衆は感動に包まれ、大きな拍手を送っていました。

第10回 福井県市町村文協選抜芸能祭

ハートピア春江 9/26

「みんなではるえさん音頭」を披露する春江文化選抜団体

第10回記念 県市町村文協選抜芸能祭（同実行委員会主催）が県内25市町村文協から選ばれた芸能文化団体が参加して、9月26日春江町のハートピア春江で開かれました。

邦楽、能楽、詩吟、日本舞踊、太鼓など地域の伝統芸能や現代的なアンサンブル、合唱グループに至る幅広い種目で合わせて約400人が日頃練習の成果をそれぞれ熱演披露しました。各ステージが終るたびに会場に詰めかけた観客から盛んな拍手が送られていました。

若手服飾デザイナー 水野弘恵ファッションショー

9/19

平成7年福井レディース・ファッション・コンペで金賞に輝くなど将来を嘱望されている服飾デザイナーの水野弘恵さん（鯖江市東米岡2丁目）の創作ファッションショーが9月19日福井市立美術館で開かれました。

コートやスーツなど女性用の秋冬物の新作40点をモデルが次々と披露。ニットとレースなど異なる素材を組み合わせたノスタルジックな雰囲気を出した作品に集まった300人の観客から大きな拍手が湧き起っていました。この発表会に、財団では新人芸術家育成のための創作発表助成制度を初めて適用しました。

たちまち「近松まつり」

鯖江市立待地区 9/25・26

真桑の人形浄瑠璃を上演

第2回たちまち「近松まつり」が9月25・26日の両日鯖江市立待公民館などで開かれました。近世の文豪近松門左衛門が立待地区吉江町で少年期を過ごしたという文化事跡を後世に伝え、新しいふるさとづくりの活力につなげようと同地区ふるさとづくり推進委員会が企画したもの。

今年は地区文化祭と一本化し、史跡スタンプラリーや芸能大会など多彩なイベントを開催。特に、国指定の重要民俗文化財、真桑の人形浄瑠璃（岐阜県真正町）を公演し、人気を集めていました。

書道展 2題 福井市で

恩泉書道展

福井玄潮会書道展

福井玄潮会 10/1～3

10月1日から3日間、福井市の県民会館で第32回福井玄潮会書道展が開催されました。

この会は、中国古典を基調として新しい現代書の創造を目指し、創作活動を続けている書道グループ（会長松村北僊氏、会員37名）。展示会には、日墨研究と錬成を重ねた力作66点が展示され、濃淡による漢字や淡墨による小字数作品など特有の書文化に、訪れた人は熱心に見入っていました。

恩泉会 10/15～17

10月15日から17日まで第19回恩泉書道展が県立美術館で開かれました。

恩泉会は福井の書道家中島牧泉氏の指導で書作活動を続けている研究会（会員120名）です。展示会には書の技術向上のための錬成会などで磨きあげた力作143点が展示され、会場を訪れた人は優れた書道文化の薫陶を円念に鑑賞していました。

今回の「情報ファイル」では、最近の財団イベントと11年度財団助成事業に決定している芸能・文化イベントの一部を紹介しました。

第2回

'99写真コンテスト ふるさと大賞

テーマ「ふるさとのまつり」

締め切り

12月15日(水)

当日消印有効

第1回ふるさと大賞「渚」鈴木能蔵氏(敦賀市)

主催：(財)げんでんふれあい福井財団
後援：福井県／福井県教育委員会／敦賀市／敦賀市教育委員会／(社)福井県文化協議会／福井県高等学校文化連盟
福井新聞社／福井放送／福井テレビ
協賛：福井県カメラ商組合／富士写真フィルム(株)／(株)福井フジカラー

部門 学生部門(高校生以上)・一般部門・一般女性部門の3部門

資格 1) 福井県に在住又は学校・勤務先が福井県内であること
2) 写真の専門家(プロカメラマン)ではないこと

作品の規格 カラー・モノクロで四つ切り又は四つ切りワイドの単写真(学生は六つ切り可)

審査員 審査委員長：八木隆氏(写真家)ほか

応募先 1) 〒914-0051 福井県敦賀市本町2-9-16 財げんでんふれあい福井財団
2) 福井県カメラ商組合加盟店及び県内フジカラー取扱店

結果発表 平成12年1月中旬

表彰 平成12年2月7日(ふるさとの日)

ふるさと大賞 1点……30万円
ふるさと賞 3点
学生10万円1点／一般20万円1点／女性20万円1点
優秀賞 6点
学生5万円2点／一般10万円2点／女性10万円2点
入選 35点 〈記念品〉
学生5点／一般20点／女性10点
佳作 35点 〈記念品〉
学生5点／一般20点／女性10点

第2回写真コンテスト入賞作品 展示会日程

敦賀会場	平成12年 2月1日～13日	げんでんふれあいギャラリー(本町2-9-16)
福井会場	平成12年 2月18日～2月23日	ショッピングシティ「ベル」(花堂南2-16-1)

アンケートご回答のお願い

本誌P10・11に添付してありますアンケート(葉書)のご回答をお待ちしています。
ご回答いただきました方に平成12年卓上カレンダー(第1回ふるさと大賞写真コンテスト入賞作品を題材にして作成)を先着100名様にお送りします。
締め切りは平成12年1月31日(当日の消印有効)です。

財団ホームページ
アドレス http://www.Genden.or.jp

「げんでんふれあい福井」第5号
1999年11月発行

(発行) 財団法人 げんでんふれあい福井財団
〒914-0051 福井県敦賀市本町2丁目9番地16号(日本原子力発電㈱敦賀事務所4階)
TEL.0770-21-0291 FAX.0770-21-9070